

# 「減風景考」

## ／縮小をはらんだ拡大郊外における住農混在地域の更新

### 00 序／風景への視座と計画の目的

#### 00-1 「風景」と「景色」は違う

私がここで扱う「風景」とは、「景色」や「景観」といった視覚的な「景」だけではなく、生活全体から生まれる人々の行動をも含めた「景」のことである。

戦後経済発展の中で、日本人は、「景」への意識が乏しかった。働く人々にとって街は便利であればよく、日本の風景や景観は絶望的なほどに失われた。近年、町並みや景観への取り組みは徐々に進み始めている。しかし、街が私達の日々の生活の場である以上、再考すべきは「風景」である。

#### 00-2 目的はベッタウンの風景の再構築である

私は、埼玉県さいたま市で育った。そこは、東京のスプロールによって生まれた典型的なベッタウンである。東京で働く人々のための“ベット”として乱開発されたこの地には、無計画に住宅が密集し、歩者分離されない車のための道がはりめぐらされている。そして現在、密集する住宅地の中にわずかに残る林や畑も、宅地開発の危機にある。(fig. 1-5)

当計画は、われわれに迫る縮小社会を踏まえた上で、拡大の時代に働く人々のためにつくられた住宅地・ベッタウンの「風景」を再構築する試みである。

### 01 背景 / 現風景

#### 01-1 ベッタウンを救うのは今しかない

人口減少や環境問題、情報革命などによって社会や都市の構造は拡大から縮小へと変化しようとしている。それにあわせて、開発や居住の形態も「都心居住」「田舎暮らし」といった新たな形を模索し始めている。しかし、その目は、東京郊外に多数存在するベッタウンには向けられてはいない。「ベット」として不遇の住環境を生んだ開発方法は見直されず、今でも人間性を欠いた利便性・経済性を優先する開発は続いている。

そして一番の問題は、埼玉や千葉などのベッタウンでは、人口がすぐには減少へ転じないことである。さいたま市では2030年まで人口は増え続け、そこで減少へ転じる。住宅開発はまだ増加の傾向にあるのだ。さらに、そのほとんどが土地相続時の分譲であるので、需要(住み手)の必要量ではなく、供給(売り手)の必要量で開発は進む。現在、住宅地の中に存在する小さな畑や林は一度開発され、その後、密集した住宅街の中から空き家が発生していくことになる。この将来的な「縮小」をはらんだ「拡大」という状況において、今のままの住宅事業を続けていくと、近自然が少なく、空き家が多い、バラバラな景観の住宅地が誕生する。散歩や菜園といった日常のレジャーを楽しむ環境に無ければか、空き家が犯罪の温床となり、さらに住環境を悪化させる。(fig. 6)

他の時期ではない、今だからこそ、都市ではない田舎ではない「郊外」の価値を考え、旧来型の開発事業ではない、新たな開発を考える必要があるのだ。

#### 01-2 郊外の「編集」をとく鍵は「レジャー」である。

団塊の世代の大量引退を皮切りに、日本は超高齢化社会を迎える。今後、高齢者となり自由時間を得るのは、戦後教育を受けた大量の知識層である。彼らは、日常生活の過ごし方に今までの高齢者以上に質を求めるようになるだろう。近年見られる、「田舎暮らし」や「散歩」などへの関心の高まりは、その一端であるといえる。

訪れるのは、レジャー(余暇)の変化である。戦後、大多数が労働者だった日本人にとって観光地やテーマパークに行くという消費行動によって満足を得ることがレジャーであった。しかし、今後増えるのは日常的な自由時間を持つ人口であり、自分の日常生活の質を考える人々である。豊かな生活行動によって満足を得ることがレジャーとなっていくのである。長距離移動を要する遠くの大自然や商業主義的なテーマパークでの体験ではなく、「隣の竹藪からそよ風にあたって小説を読む」とか「庭先で取れたトマトを夕食で食べる」とか「散歩の中で人と出会ったり、街の移ろいを発見する」といった体験に関心が集まるということである。

都市は、生活行動をレジャーとできる環境に代えていく必要がある。

#### 01-3 減風景への戦略

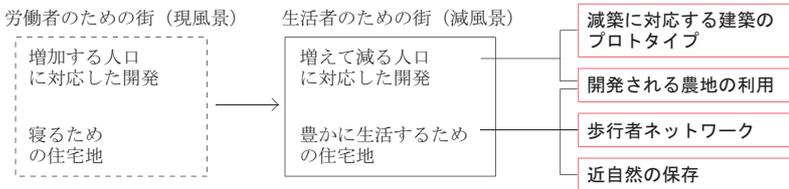


fig.1 郊外の実風景



fig.2 消失する原風景



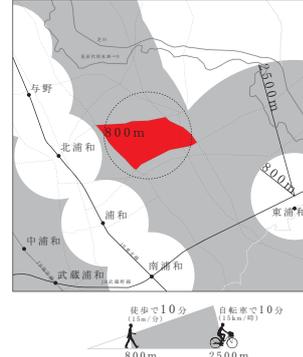
fig.3 郊外の現風景



fig.4 敷地周辺航空写真

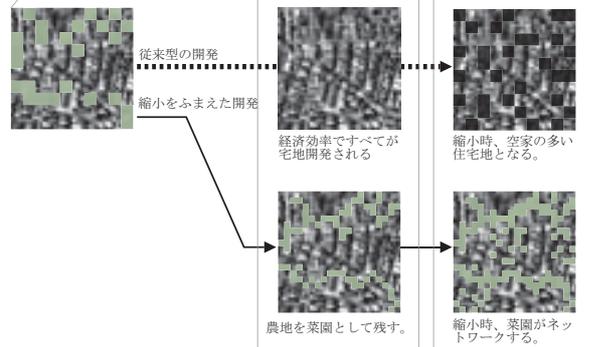
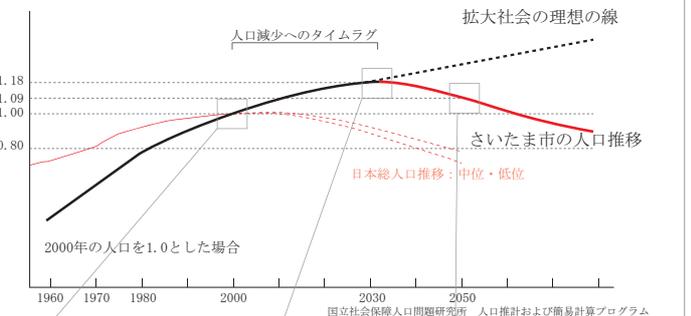


fig.5 対象敷地と駅券圏



対象とする地域は、JR浦和駅/北浦和駅からは、徒歩圏外であるが、自転車圏内にはある浦和区と緑区にまたがる地区。四方を、国道や地方主要道に囲まれる地域小学校(さいたま市立道祖土小学校)の通学区である。地域小学校の通学区というのは、小学生でも通学が可能とみなされる区域であり、1つの地域共同体ともいえる。駅からの徒歩圏外(800m以上)であることを考えると、確実に人口の減少に直面する地域であるが、自転車の圏内(2500m以内)であることを考えると、人々の生活圏としては住空間を構築できる可能性がある。

fig.6 さいたま市の人口推移





## 02 マスタープラン／減風景

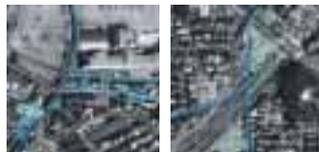


### 02-1 埋もれたものを掘り起こす

当計画の目的は、豊かな住環境とともに歩行者ネットワークの創出していくことにある。そこで、用水路の流れや残った農地などといったこの街の原風景に注目する。それらは、自然と人間の生活がともにあった時代の記憶である。自動車道のネットワーク、宅地造成、暗渠化の中で、埋もれてしまったが、歩くことが目的となる時代において、それらを掘り起こす意味が出てくるのである。減風景の構築は、そこから始まる。

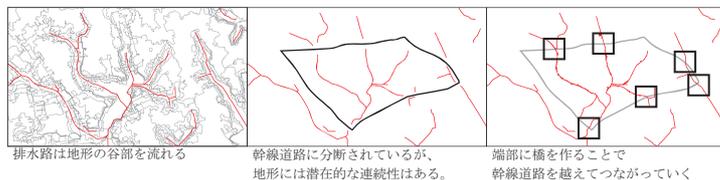


### 02-2 水系ネットワークと橋／潜在する線在



隠れた水系に歩者・自転車の道を形成する。

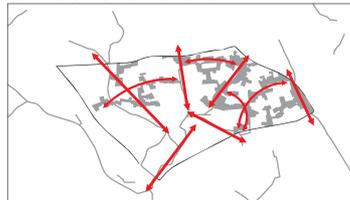
もともと田畑を潤していた用水路のネットワーク。現在は、暗渠化され生活排水路へと変わっているが、水の道は、地形が伴っており、道路などに分断されない連続性がある。ここに歩行者の道をつくり幹線道路と立体交差させることで、地域内、さらにはその外へとネットワークする歩行者空間ができる。



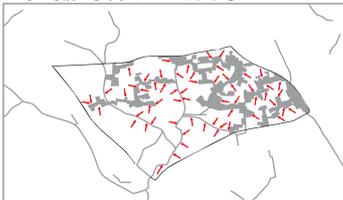
### 02-4 歩行者ネットワークのフロー

二つのネットワークは絡み合いながら、雑木林や公園や公共施設を取り込んでいく。水みちは明確な歩者・自転車の道として新たな都市軸となる。農園住宅帯は、それを横でつなぎながら、人の生活と農園を近づける空間を形成していく。二つの歩行者空間は、補完的に地域を網羅していく。

水みちと農園連続体のネットワーク



いろんな所からネットワークに入れる

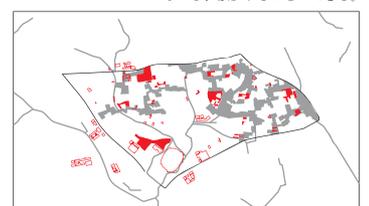
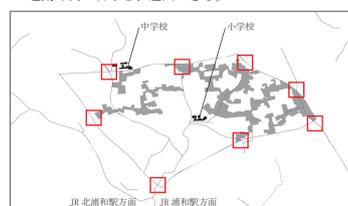
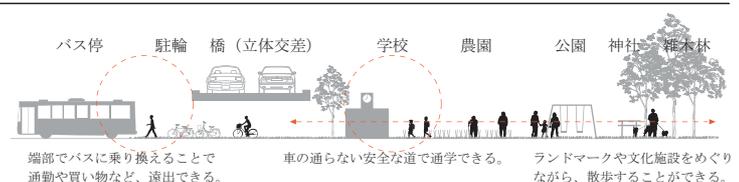


### 02-3 農園住宅帯／潜在する点在



点在する畑のネットワークを形成する。

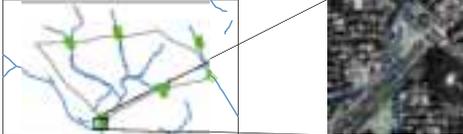
敷地の中に点在している畑には、今、住宅開発の危機が迫っている。生産の場としては、脆弱であるため、住宅地になってしまう。そこで、人口推計の最大値を踏まえながら、低密度に開発すると、市民農園に住むような住宅地ができる。さらに、駐車場やアパートなど取り込みながら、ネットワークすることで、歩行者の為の道ができる。そこは人々が、畑仕事や散歩を楽しむ日常のレジャーの場となる。



□ バス停・生活施設・橋・駐輪場 ■ 雑木林 □ 文化施設・学校・集会場・公園・神社



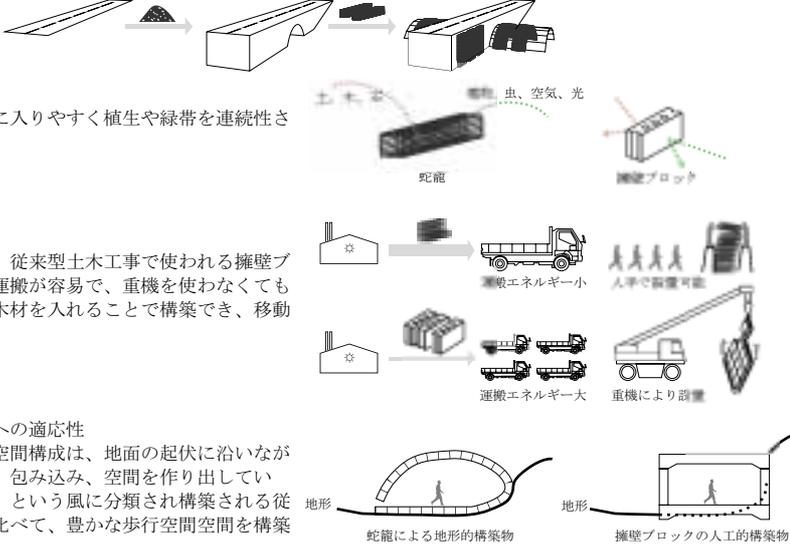
03 Case study 01 交通による分断をつなぎなおす「橋」



水系と自動車交通が交わる端（橋）を設計する。  
 自動車交通によって分断されている水系の歩行者路をつなぐ橋によって、幹線道路に規定される地区にとどまらない歩行者のネットワークが生まれていく。

03-1 建築の構成

■ 蛇籠による構成  
 車の交通と歩行者路を立体交差する操作では、大量の土木工事（用壁工事）が必要となる。従来型土木工事で使う擁壁ブロックではなく、ジャコゴ/フトンカゴによるランドスケープを製作する。



土留めとしての面は、緩やかにランドスケープを描きながら、丘になり、緩やかに地形をつなぎ、パーゴラになり、日陰を作り、草花棚になり、植生を連続させる。土木、造園、建築という3者をひとくくりで考える構法である。

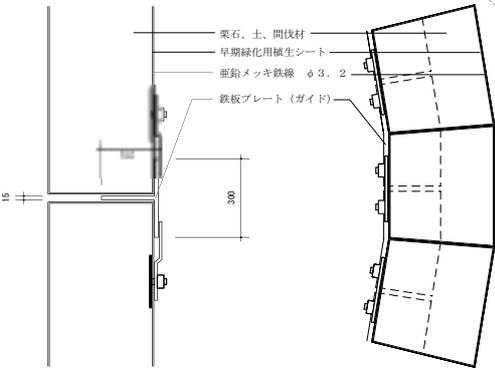
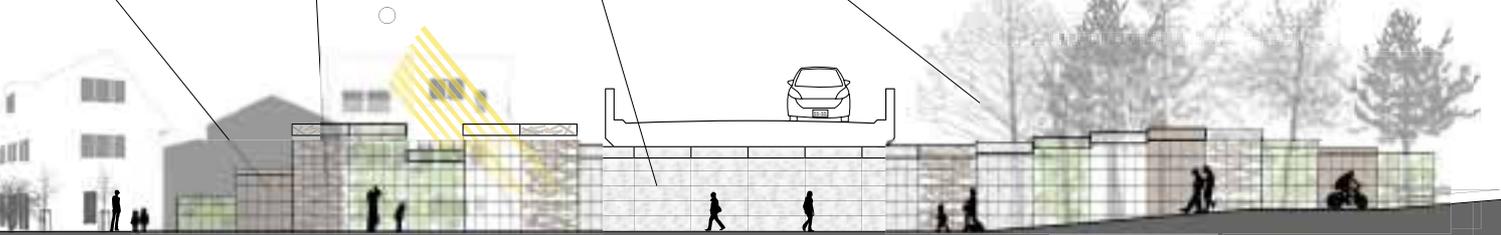
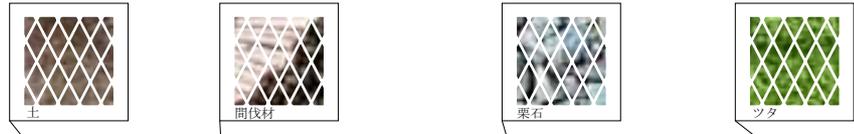


fig. 蛇籠連結詳細  
 アクソメ(上)、水平断面(左)、垂直断面(右) scale 1/30



fig. 立体交差

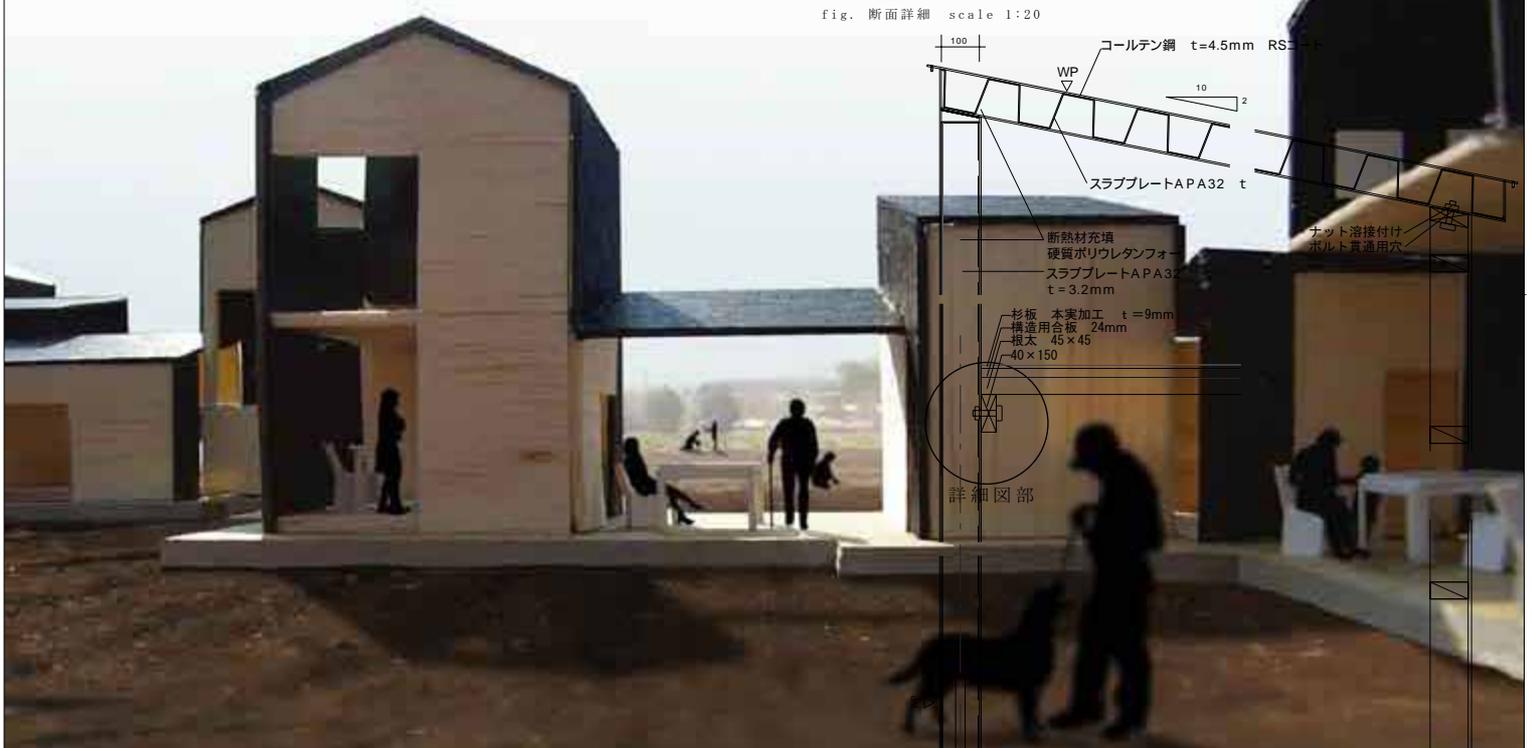
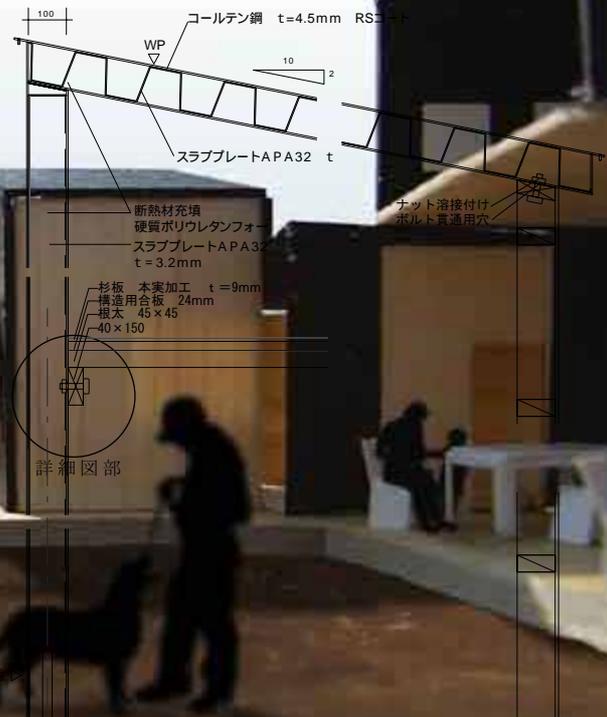
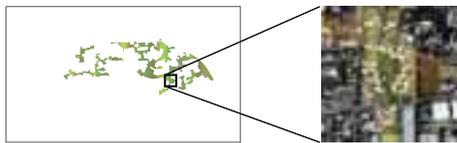


fig. 断面詳細 scale 1:20



04 Case study 02 縮小をふまえた開発「農園住宅帯」

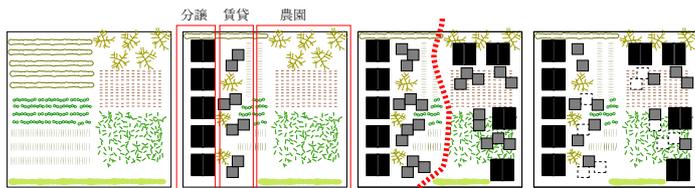


畑に農園住宅を設計する。  
 開発の危機にある畑に、人口増加の最大値を踏まえた上で、畑を残して低密度で小さな住宅群をつくる。市民農園の中にすむような住宅地ができ、人と農が結びつく風景が構築されていく。

04-1 プログラム

■ 分譲住宅と賃貸住宅

畑の接道部分を分譲住宅、その内部に賃貸住宅を計画する。  
 内部の庭はその所有があいまいになるので、農園が公共的なものとして街に開かれる。賃貸の物件は、その機能を限定せず、アトリエやsoho、市民農園用の小屋や周りの家の増床などにも使われることで、縮小の時代ののりしろとなる。  
 なお、賃貸住宅は分譲住宅売却の利益で建設される。



接道する周縁に分譲売却、内部に賃貸住宅を小さな規模の建築で作る。住宅・市民農園小屋・SOHO 賃貸住宅部が減少する時の「のりしろ」になる畑の中の散歩道ができる。

■ 景観コントロールつき住宅政策

プロジェクトは、対象地域を構造改革特別区域「住農混在レジャー特区」に指定することで、運営される。

04-2 建築の構成

■ 小さい空間

小さな空間は、機能を住宅だけに限定せず、週末住宅やちょっとしたアトリエやオフィス、市民農園用の小屋など多用途の使い方を生む。空間の大きさとしては、日本人が昔からなじんできた4畳半、6畳、8畳という大きさを基準にし、メーターモジュールにすることでスケルトンの大きさを決定している。  
 さらに小さな空間を雁行形にすることで、まち並みとしてのリズムと生活の風景の重なりを生む。屋根は、小さな単位ごとにつけられ、屋根並みが連なっていく風景を作り出す。

■ 風景となる構造

コルテン鋼のサンドイッチパネルという薄くて非常に強い板が折れ曲がり、屋根となり、壁となり、構造となる。  
 コルテン鋼の屋根は、人口減少の時代においても、空き家や空き地のような町並みのプランクを作らずに、恒久的な屋根のラインを描く。逆に減少に合わせて、インフィルを取り除いていくことで農家の土間や縁側のような半屋外空間を発生させることができる。そういった空間は、建築の内と外をつなぐ中間領域となり、外にある畑とつながる使いよい空間となる。インフィルを取り除くことは工事費などがかかるが、出来上がる空間の使い良さによって、インフィルをはずすことに付加価値がつき、縮小の時代にあった空間に自然に誘導されていく。

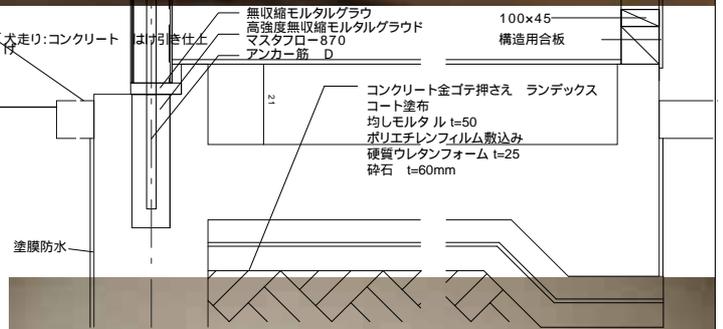


fig. 農園住宅帯

fig. 空間構成

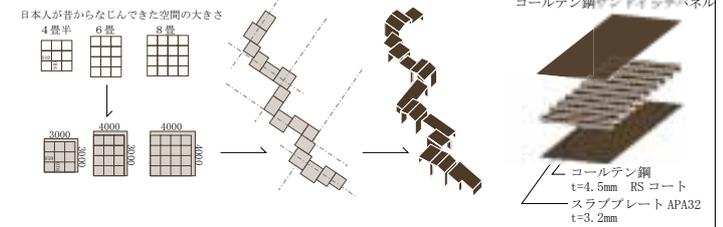


fig. 取り除かれるインフィル

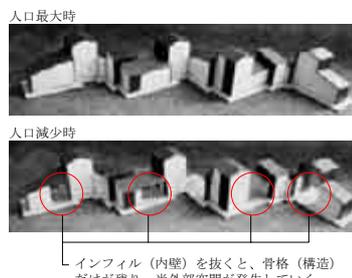
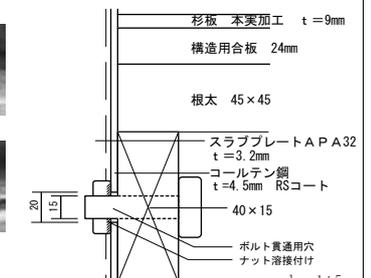


fig. 構造(鉄)と内壁(木)の取り合わせ詳細



scale 1:5